

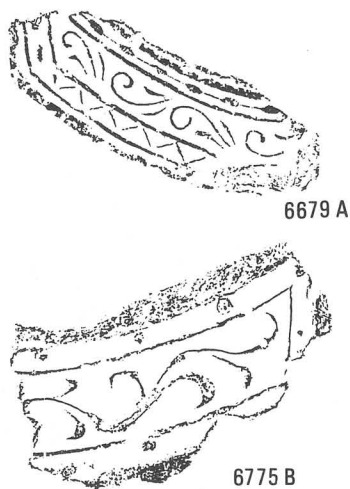
Ⅲ 京内寺院等の調査

1 法華寺境内の調査 第151—16次

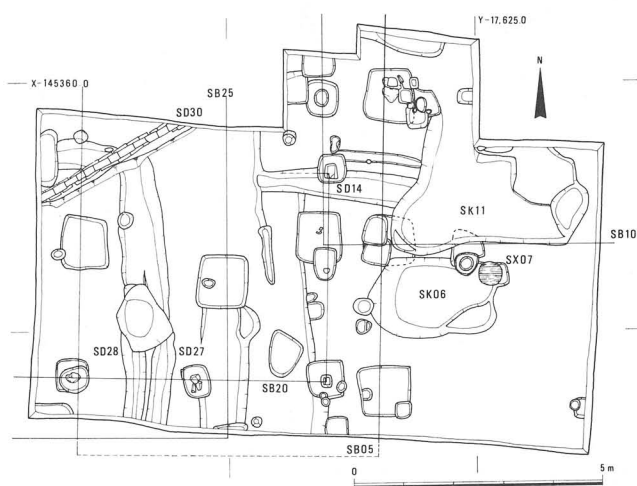
法華寺境内における茶室建設に伴う事前調査である。調査は浴室北側の畑地であり、東西11m、南北6mのトレンチを設定した。調査の結果、奈良時代から近現代までの建物、溝、土壌等が地山及び3層に及ぶ整地土面で検出された。

奈良時代の遺構は、黄褐色粘土又はその直上に堆積する茶褐色砂質土に構築された3棟の建物である。SB 05は桁行2間以上、梁行2間（10尺等間）の掘立柱南北棟。SB 10は、東西、南北共1間以上（10尺等間）の掘立柱建物。SB 25は東西、南北共1間以上（12尺等間）の掘立柱建物である。いずれも柱掘形は方形状で一辺0.7～1.0mと大型であるが、深さ0.1～0.5mと全体的に浅く、廃絶後この付近がかなり削平されたことをうかがわせる。配置からみて、いずれも共存し得ず、三時期に区分されるが、具体的時期の決め手を欠く。

SB 20、SD 27・28は、ともに二層目の暗褐色砂質土面から掘り込まれるが、検出状況からSB 20の方が古い。SB 20は桁行2間以上、梁行2間の東西棟で、北側柱列の一部は未検出であるが、一辺0.6m前後の柱掘形の中央に人頭大の川



第31図 法華寺境内出土軒瓦



第32図 法華寺境内発掘遺構図

原石を据える。

SD 27・28 は、北で西にやや振れる南北溝で、深さは20～30 cmである。SK 06、SX 07、SK 11、SD 14 は、近世の遺溝である。またSD 30 は、平瓦と丸瓦を組合わせた排水路で、層位的には最上層に構築される。

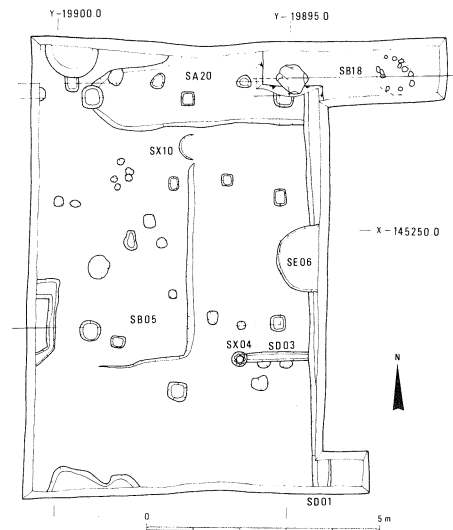
出土遺物には、土器類、瓦類があるが、大半は整地土中から検出されている。軒瓦は、奈良時代前半から近世にわたる40点（軒平瓦13点、軒丸瓦27点）が出土したが、うち6割強が奈良時代後半期のものである。

2 西大寺境内の調査 第151—25次

本調査は、収蔵庫建設に伴う事前調査で、当該地は、本堂の東方約30 mの位置にあり、「西大寺々中曼荼羅図」によれば、叡尊伽藍再興時の東室や奈良時代の住宅遺構等の存在が予想された。調査区は、東西6 m、南北9.5 mのトレンチを設定したが、検出遺構の主なものは、建物2棟、堀1条、溝、井戸、泉水、土壇等で、出土遺物からみて中世以降のものである。

表土から約0.7 m下で黄褐色粘質土の地山に達するが、この間に大略二層の整地土がある。SD 03、SX 04、SE 06、SB 18 は上層（暗褐色砂質土）、SD 01、SB 05、SX 10、SA 20 は下層（暗灰褐砂色土）面で検出された。SD 03、SX 04 は、黄色砂混りの漆喰造泉水の導水関係遺構で、井戸 SE 06、礎石建物 SB 18 と一連の近世の遺構である。

SX 10 は炉跡と推定される遺構で、焼跡は残らないが、床面は堅く、付近に焼灰が散布しており、近隣のピットからはふいごの羽口1点、また整地土中から若干の鋤滓が出土した。



第33図 西大寺境内発掘遺構図

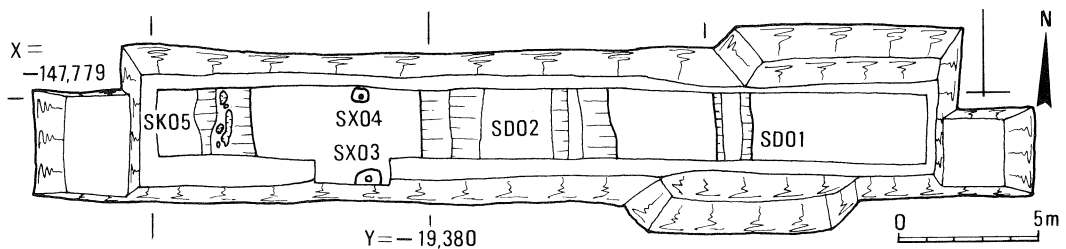
3 薬師寺旧境内の調査 (1)

薬師寺の子院養徳院の移転予定地における事前調査である。調査地は薬師寺本坊の北側の空地（P 60. 第36図）で、絵図によると近世に子院の存在が知られ、また奈良時代には薬師寺の寺域に属し、かつ平城京条坊に関連する遺構の存在も推測されていた。東西方向の発掘区を設け、調査面積は198㎡である。

調査地の土層は、上から (1) 最近の盛土（1.5 ～ 2.0 m）、(2) 旧水田耕作土・床土（0.3 ～ 0.4 m）、(3) 暗褐色砂質土ないし茶褐色砂質土（0.2 ～ 0.3 m）で、その下は黄色粘土の地山となる。

(3)には多数の細溝や土壌が掘られており、いずれも中世～近世の遺物を含む。この層からは南北大溝SD 02 が検出された。幅7.0 m、深さ2.0 mの規模で、断面V字状をなす。溝内は上から下まで黒灰色粘質土が堆積しており特に土層を細分することはできず一連の堆積と見られ、その中からは少量の土器、染付陶器、瓦、木製品等が出土した。瓦器は伴っていない。

発掘区西端の土壌SK 05 もこの(3)層で検出したものである。西にのびる土壌の東端を検出した。深さ0.6 mで底はほぼ水平である。土壌の底および東肩は黄色粘質土の地山である。底には灰色粗砂（厚さ0.15 m）が堆積するが無遺物である。その上は強く締まった茶褐色粘質土（0.4 ～ 0.45 m）があり、多量の瓦に三彩片、瓦器片も混ざっていた。茶褐色粘質土の中には人頭大の石4個があり、いずれも据付けられた状況ではなかった。堆積土の下、土壌の東肩に検出された数箇所の浅い窪みにさきの石を据付けてみるとほぼうまくすわることから、この窪みには本来石を据えてあったことが予想されるにいたった。



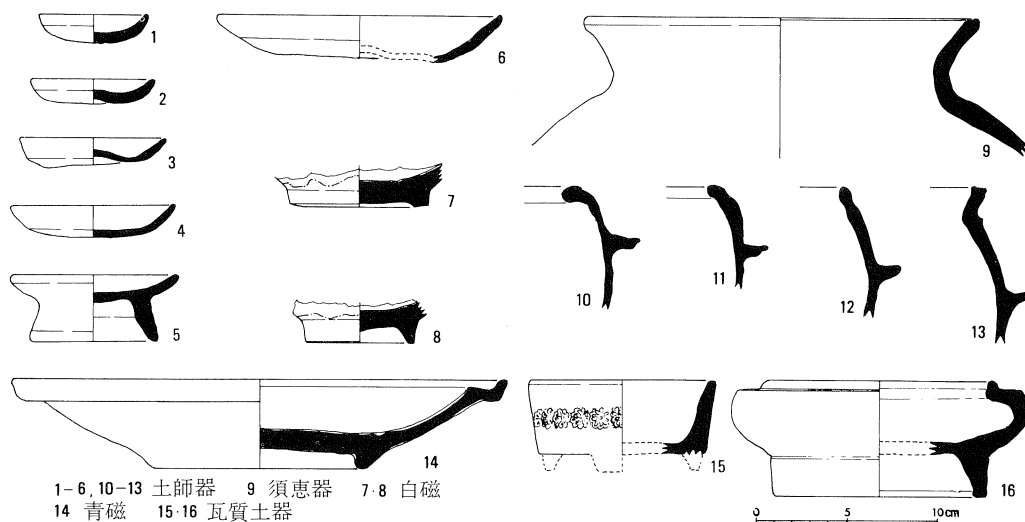
第34図 薬師寺旧境内(1)発掘遺構図

次に述べる南北溝SD 01 や掘立柱穴SX 03・04 は地山面で検出した。

SD 01 は幅2.0m、深さ0.4 mの規模で発掘区の北と南に延びる。埋土は茶褐色粘質土で多量の瓦片と須恵器片1点を含んでいた。いずれも奈良時代の遺物のみである。SX 04 には直径0.15 mの柱根が遺存しており、上部の空洞には瓦片(中世以降のもの)がつまっていた。二つの柱穴の関連は明らかではない。

出土遺物には瓦、土器、木製品がある。瓦は大量の丸瓦・平瓦のほか軒丸瓦・軒平瓦若干がある。土器では奈良時代の須恵器、土師器、中世～近世の土器等があり、特に三彩の存在は注目される。木製品ではSD 02 出土のコマ状品がある。

以上の結果をまとめると、まず、奈良時代に属する遺構はSD 01 があげられる。この溝は平城京の条坊を、薬師寺寺域内に延長した場合、右京六条二坊一・八坪の坪境小路の東側溝の位置に当たる。この場合西側溝は、たとえ設けられたにせよ、後世SD 02 によって破壊されているものと思われる。あるいは逆にSD 02 自体が西側溝を踏襲したものである可能性もあろう。SD 02 は含まれている遺物や掘り込まれている土層からみてその掘削の時期は近世初頭、遑っても中世末頃と推定される。この溝の性格は不明だが堆積層の状況などからみて常時流水があったのではなく、むしろ滞水していたか、あるいは空堀の状況を呈していたとみられ、防御的な目的をもった堀とも推測される。なお後考に持ちたい。



第35図 南北溝 SD 02 出土土器

4 薬師寺旧境内の調査 (2)

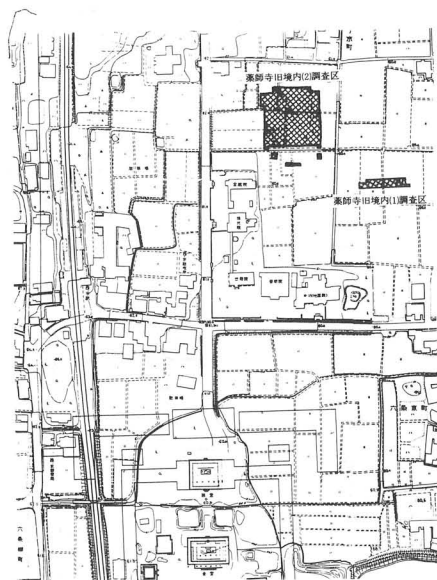
本調査は、薬師寺が法相宗の祖師元奘三蔵を祀るために建設する三蔵院の工事に伴う事前調査で、調査地は平城京右京六条二坊九・十坪にあたる薬師寺の旧境内で「薬師寺縁起」等によって、九坪が苑院、十坪が倉垣院と蘭院に推定されている。また中世には子院が建ち並んだ地区であるが、十七世紀頃の「伽藍寺中之図」では福蔵カ院跡と記され、同じ頃の「伽藍寺中并阿弥陀山之図」でも子院名が記されず（両図とも『奈良六大寺大観』薬師寺所収）、近世には子院は退転して荒地だったらしい、奈良時代の遺構の検出が期待されたが、結果は殆んど平安時代から近世に至る遺構ばかりであった。

発掘区は東西43m、南北46mのほぼ方形とし、遺構の広がりを見るために東西水路南側にトレンチ三ヶ所をあけた。上層は旧水田の耕土、暗灰色砂質土・暗灰褐砂質土の遺物包含層があり、淡黄褐色又は青灰色砂質土の地山に至る。床土・遺物包含層の厚さは発掘区北部では各々5cm、10cmと薄い、南へ向って厚くなり、40cm、60～70cmとなる。

遺 構 検出した主な遺構は、奈良時代の土壇1（SK 25）、井戸1（SE 04）、平安時代の井戸3（SE05、06、16）、中世の溝4（SD28、32、33、34）、中世の井戸5（SE01、02、07、08、21）、近世の溝（SD26、27、29、30）、近世の井戸多数である。

SE04は径1mの掘形に豎板の井戸枠を入れ中に径0.7m、深さ0.5mの曲物を枠とする。井戸底から和同開珎1、万年通宝3、神功開宝17枚が一括して出土し、井戸埋土上部からは三彩の薬壺が完形で出土した。

SE06は径3mの掘形内に豎板組の井戸枠をおく。枠は隅に断面3寸×4寸の角杭をたて、

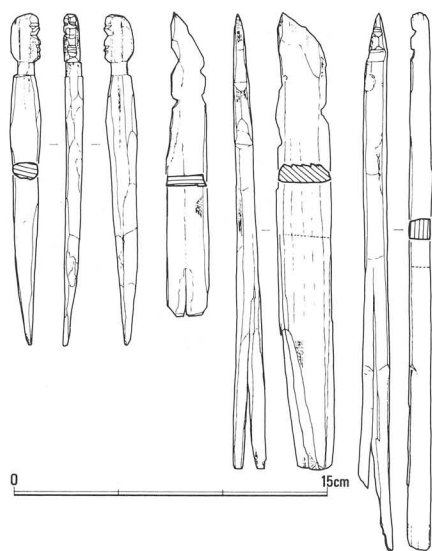


第36図 薬師寺旧境内調査位置図

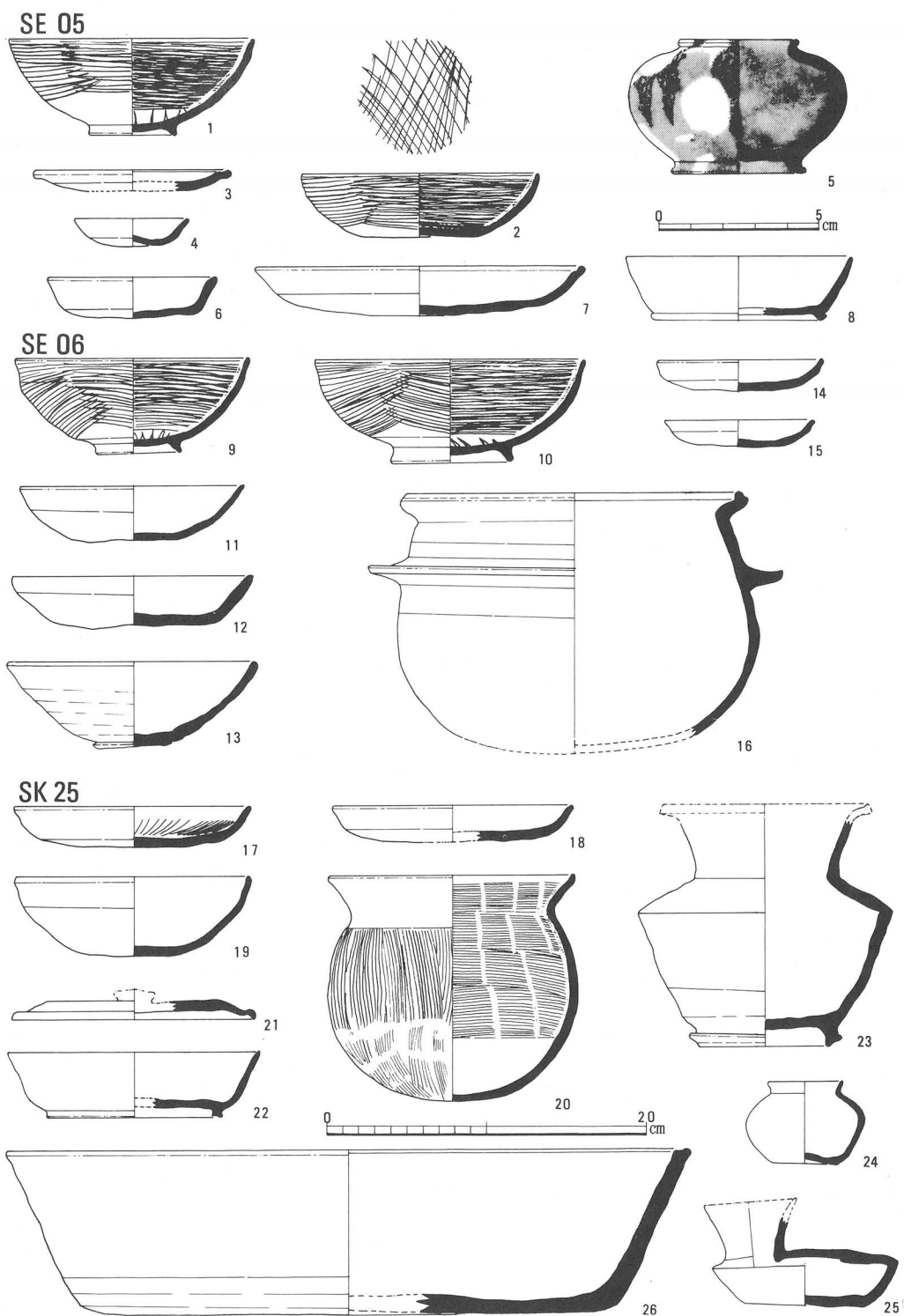
横棧をわたして豎板をとめる。底部は更にほりくぼめて径40cmの曲物をおく。井戸埋土には11世紀後半から12世紀前半の瓦器碗、瓦器皿、須恵器碗が大量に投棄され廃絶時期を知る。須恵器碗には神戸市神出古窯製作のものも混る。SE05、01は瓦の木口を内側に向けて積む構造で、中に奈良時代から平安時代にかけての薬師寺所用軒瓦が含まれる。廃絶は中世以降である。SD28・32・33・34は幅1～1.5m、深さ0.5mの薬研堀で、SD34は溢水してSD28に連なる。中世の子院を画していた溝であろう。SD26・27・29・30・31・35・36・37は、底から近世の陶磁器を出土する幅3～5m、深さ1mの大溝である。前述の絵図にもみえており、絵図では同様の溝が発掘区東南方へ地藏院、養勝院等のまわりにも描かれているので、近世の子院を画する堀だったらしい。なおSD29からは丸瓦を並べた暗渠でSG39に水をひいている。以上の他東半部の平坦地には多数の小穴があり、おそらく中世の子院の建物に係る遺構と思われるが、建物としてまとまるものはない。

遺物 出土遺物としては、人形、前述の貨幣、大量の土器・瓦がある。人形はSE02から出土しており、類似した形態の人形が草戸千軒町遺跡から出土している。土器にはSE06出土の瓦器・須恵器の他、多数の元・明代の輸入陶磁も含まれる。瓦も奈良時代から近世の巴瓦までを含み、伽藍や周辺の子院の所用瓦であろう。

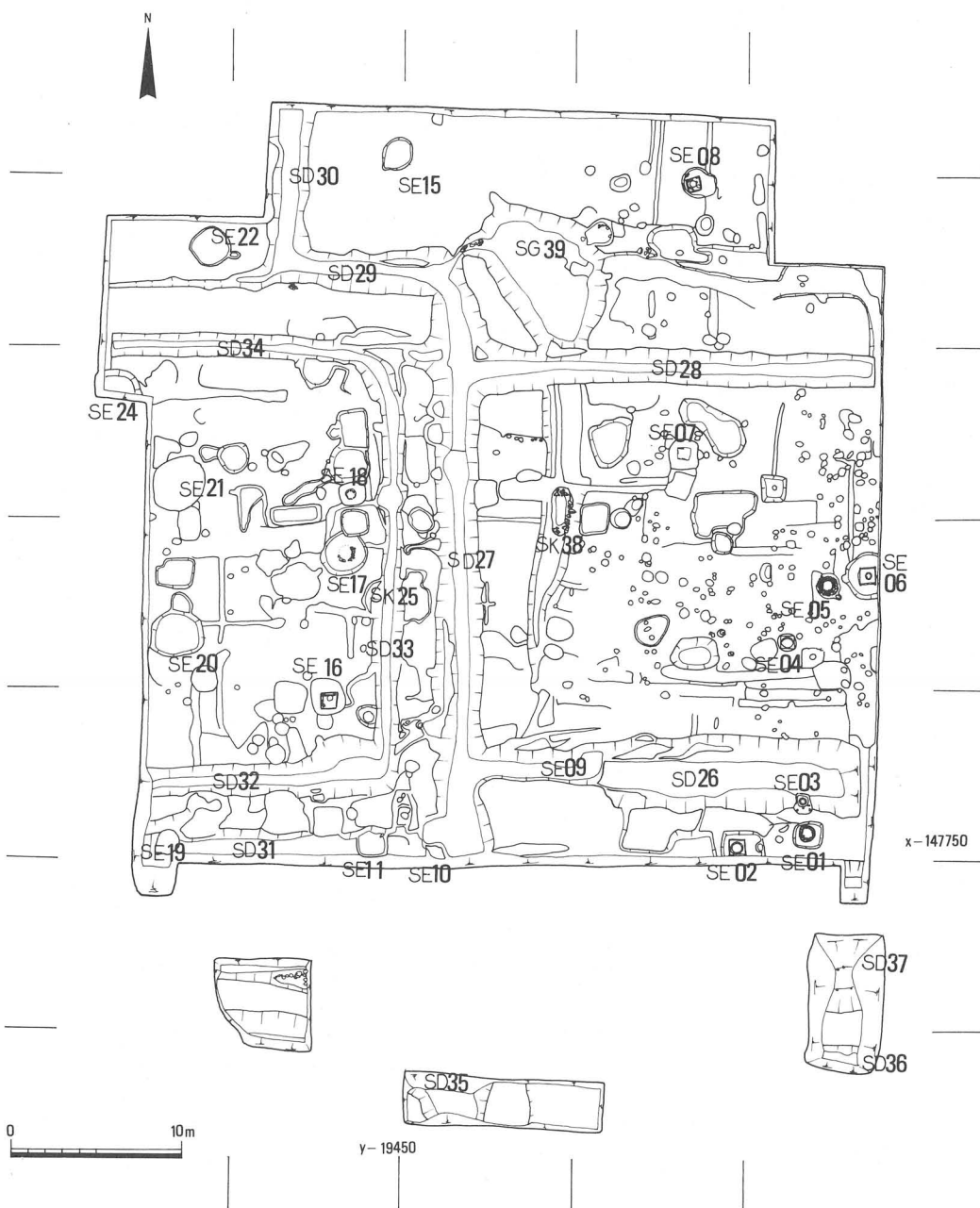
まとめ 奈良時代の顕著な遺構はなく、このことがかえって苑院であった証左であるかもしれない。平安時代以降は多数の井戸を掘り、大規模な溝で区画されており、11世紀後半から16世紀にかけての大量の土器類は子院内での生活が営まれていたことを物語る。出土した陶磁器は官の大寺としての寺格を失った後も豊かな経済力を長く保っていたことを物語っている。



第37図 井戸（SE02）出土の中世人形



第38図 井戸・土壇出土土器

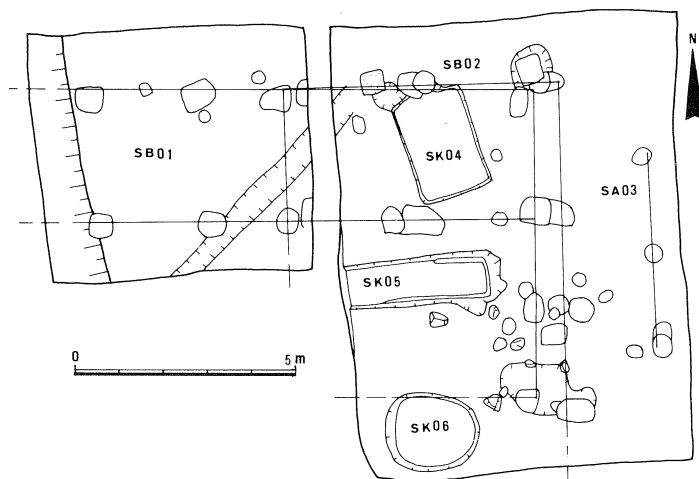


第39図 薬師寺旧境内(2)発掘遺構図

5 春日大社境内の調査

社務所建設に伴う事前調査。調査地は旧社務所を撤去した場所である。建設予定地のほとんどは旧社務所の建設の際に大きく削平されている。東方部は竈殿から傾斜をもって下がりながらも約 1.5 m 高くなっているため、ここに南北トレンチ（東西 4.6 m、南北 19 m）を設定し、その中央部から西方に東西トレンチ（東西 20 m、南北 3 m）を設定して調査を実施した。

遺 構 南北トレンチ内では後世の瓦捨て場や防火用導水管の埋設のために攪乱がいちじるしく、北半部で大小の礫が集中してみられる集石遺構や小穴をいくつか検出するにとどまった。東西トレンチでは、東端から約 8 m 以西が後世の攪乱を受けていたため、東部でトレンチを拡張した。主要な検出遺構は掘立柱建物 2、掘立柱塀 1、土壇 3 である。SB 01 は桁行 4 間以上（2.5 m 等間）、梁行 3 間北廂付き（身舎 2.1 m、廂 3.1 m）東西棟建物である。SB 02 は SB 01 に先行する桁行 4 間以上、梁行 2 間（3.0 m 等間）南北棟建物である。桁行方向の柱間寸法は一定でない。両者ともに柱掘形から出土した瓦器によって中世に属することが明らかである。この地域は、行幸時などに臨時の建物が営まれる場所なので、そうした際の仮設の建物と考えられる。SA 03 は南北塀で、その振れから SB 02 と



第40図 春日大社境内発掘遺構図

同時期かと思われる。

3基の土壇はいずれも中世以降のものである。

遺 物 出土遺物のほとんどは中世以降の土師器、いわゆる「かわらけ」であり、祭器として用いられたものである。他に若干の瓦器がある。

表 2 未記載調査一覧

次 数	調査位置と目的	検 出 遺 構	備 考
第 151 — 7 次 — 9 次 — 3 次 — 8 次 — 14 次 — 23 次 — 31 次 — 21 次	平城宮推定大膳職地区 “ 平城宮北方大蔵省関係遺構の確認 “ “ “ “ “	中世柱穴 2 検出 遺構残存せず、地山を確認 “ “ “ “ 小ピット 2 検出	中世瓦器片出土 中世瓦片のみ — 土器・瓦片少量 — 土器片少量 土器片少量、瓦片少量
— 11 次 — 13 次 — 32 次 — 1 次 — 30 次 — 6 次	左京一条二坊十四坪 左京二条二坊十三坪 左京二条二坊十五坪 左京三条二坊三坪 左京四条二坊一坪 五徳池西における九条大路検出 称徳山荘推定地関係遺構の確認	小ピット 1（柱穴か？）、近世井戸を検出 十二・十三坪坪境小路、建物 18、堀 2、粘土採掘壙多数 中・近世柱穴 5 検出 掘立柱建物 8、堀 4、井戸 2、土壙 4、三坪を東西に二分する南北堀検出 奈良時代掘立柱建物 5、堀 6、八角形井戸 1、土壙 5 検出。埴多数出土 九条大路推定北側溝北半部を検出 遺構残存せず、地山を確認	— 平城京左京二条二坊十三坪発掘調査 奈良時代瓦片 平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告 平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告 市道九条線関係遺跡発掘調査概報（Ⅱ） —
第 149 次 第 151 — 4 次 — 12 次 次数外	右京八条一坊十一坪および西一坊坊間大路の検出 東大寺北面大垣の確認 西大寺伽藍の検出 法隆寺関連遺構の検出	西一坊坊間大路両側溝、井戸 1、建物 1、堀 3、その他土壙多数 中世の井戸・土壙・溝を検出したが北面大垣は残存せず 室町時代末の南北溝 西室跡、瓦窯など奈良時代から近世に至る遺構多数	平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告 中世土器片 土器片少量 法隆寺発掘調査概報Ⅲ 予定